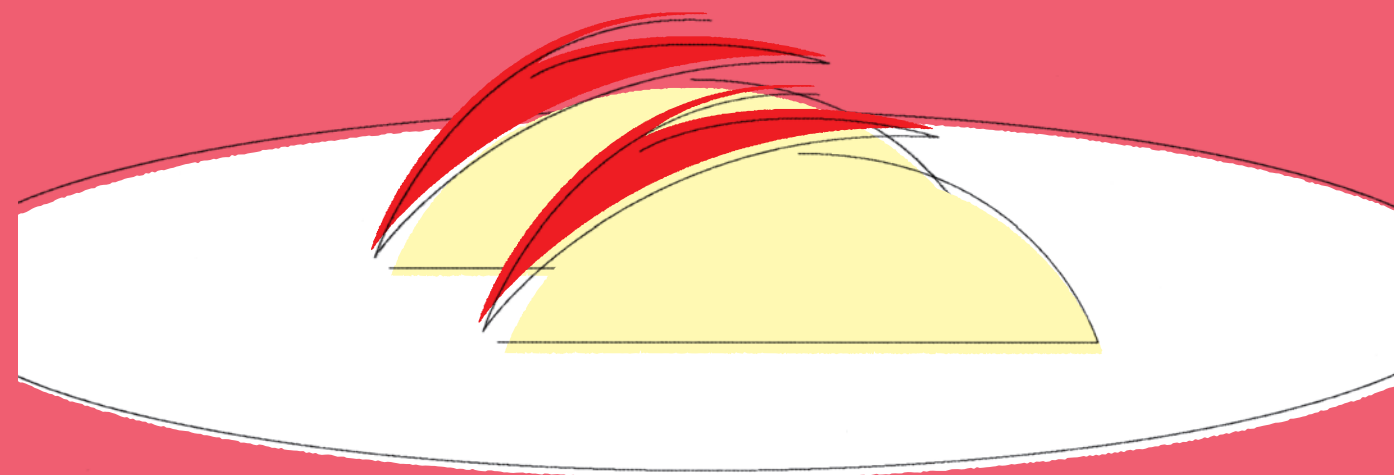


カイゴの仕事研究室

Kaigo Work Laboratory

カイゴの
仕事研究室
学生レポート

暮らしをつくる



はじめに

みなさんは、介護に対してどんなイメージを持っていますか？

この冊子では、常識にとられない介護事業を、学生たちが肌で感じたままに紹介します。

各事業のレポートを読み、興味が湧いたら、より詳しい動画もあるのでぜひチェックしてください。

将来、介護職に関わるきっかけになればとても嬉しいです、

そうでなくても、働くうえでいいヒントには、きっとなると思います。

福祉

フクシ

ふくし??

就活に役立つし、お金ももらえる！そんな軽いノリではじめた福祉のインターン。もちろん福祉の知識はゼロだったけど、知れば知るほど自分の中の常識がひっくり返る。“福祉・介護”は、食事や排泄の介助。ルーティンワークしかない。そんなふうには思ってたけど、実はぜんぜん、そうじゃない。あなただからできるケア、あなただからできる声かけ…。「あなただからできる」そんな仕事の代表が、福祉・介護なんじゃないかな。福祉と出会い、想像もしていなかった世界と、可能性に満ちあふれたワクワクする世界が見えてきた。

インターン生プロフィール

神戸大学
国際人間科学部
グローバル文化学科・2年

フクちゃんこと
中川 弘子



「せっかく時間あるんだから普通のアルバイトじゃできない経験がしたい！」と思い、はじめは興味と好奇心で応募しました。福祉の知識は全くなく、少しの興味しかなかったですがインターンの面白さ、居心地の良さと福祉の奥深さに魅了されました。

大阪教育大学
教育学部
教育協働学科・3年

シーちゃんこと
澤田 佳詩乃



私がこのインターンに参加したのは、「0から1を創り出す経験をしてみたい」と思ったからです。このインターンで、いろいろな人に出会って、たくさんの方の価値観に触れて、知らない世界を深く知ることができました。みなさんもそんな素敵な出会いをぜひ経験してください。そして、その出会いの第一歩がこの1冊となりますように。



シーちゃん

介護の力で、 オーダーメイドな「人生最高の旅」を プロデュース！

介護が一気に魅力的に！

こんにちは！2021年4月から一般社団法人FACE to FUKUSHIでインターンをしているシーちゃんです。ふだんは大阪の大学に通っていて、勉強やサークル、恋愛などに勤しんでいるふつうの女子大生です。正直、このインターンに参加するまでは、「福祉・介護」には関心がありませんでした。しかし、そんな私が、「福祉・介護」を一気に「魅力的！」と感じるようになるなんて！そのきっかけは、NPO法人しゃらく・小倉譲さんの活動を知ったことでした。

介護が必要な方の、人生最高の旅を叶える。

「NPO法人しゃらく」さんは、配慮や介護が必要な方の「行きたい旅」のお手伝いをされている法人です。介護付き添い旅行というもので、ときには海外へ行くことも！要介護認定を受けていたり、車椅子や寝たきりの方が旅に行くのは「不可能だ」と、思う人のほうが多いと思う。けれど、そんな現実を疑問に思ったのが小倉さんでした。「自分のやりたいことができない社会」「行きたい場所に行けない社会」から、すべての人が「できる！行ける！社会」へ。小倉さんは今日も、その実現に向けて猛進されています。

旅は最高のリハビリ。

小倉さんの創業のきっかけは、介護が必要になった自分のおじいさんと行った旅行。旅の手配のために旅行会社に依頼したところ、「何かあったらどないすんの」とい

うことで、どこからも断られてしまったのです。そして、それなら自分で連れていくと決意。旅行先は、おじいさんが希望した徳島県の人丸神社。神社に到着すると、それまでは5メートル歩くのもやっとだったおじいさんが、なんと神社の階段を登りはじめた。さらに、そこにいた神主さんと立ち話を一時間も。この光景を見て魂が震えた小倉さんは、「旅は最高のリハビリ」であることを確信。それが、しゃらく設立につながっています。

ぜひ、小倉さんのお話を聞いてほしい！

「車椅子や寝たきりの人が旅に行くなんてリスクが大きすぎる」。少なからず私もそんな固定概念に縛られていたように思います。けれど、小倉さんの「できない理由を考えるより、できる理由を考える」という哲学にふれて、ハッとしました。新しいことをはじめたいのいつの間にか立ち止まっている、そんなモヤモヤした気持ちが晴れました。「介護の概念をぶち壊して、社会をもっとよくしていきたい」。そう話す小倉さんのパワーに、ぜひふれてみてほしいです！

しゃらく小倉さんのお話はコチラから！

https://openfukushi.com/movie_show/21



小倉さんプロフィール



NPO法人しゃらく
理事長 小倉 譲

<https://123kobe.com/>

家族の里帰りをきっかけに法人を立ち上げ。旅をあきらめていた方や、最期が間近に迫った方に、介護や看護の力を使って、オーダーメイドな「人生最高の旅」をプロデュースしている。



フクちゃん

非日常の暮らしをつくる 町おこしファッションショー。

介護×ファッションショー！？

FACE to FUKUSHIでインターンをしているフクちゃんです。国際系の学部で、主に観光やまちづくりについて学んでいます。いっけん関係なさそうに見えますが、「企画がしたい」「なにか新しいものをつくりたい」「みんなが知らない魅力を発見し、発信してみたい」という思いがある人は、意外と福祉との接点が多いかもしれません！これからご紹介する山之口ゆいさんも、介護とファッションショーを掛け合わせ、介護に新たな風を吹き込んだすごい方なんです。

介護業務をしながら、 町おこしのプロジェクトメンバーに。

山之口さんは、社会福祉法人豊悠福祉会の職員さんです。入職後は、生活支援やレクリエーションなど介護の現場で経験を積まれます。利用者さんとのさまざまなやりとりを通じて、介護の魅力に気づきはじめた頃、法人主催の町おこしイベントのプロジェクトメンバーに。そして、介護業務も行いながらプロジェクト業務を経験するなかで、今回のファッションショーのプロジェクトリーダーに抜擢。ファッションショーのモデルはもちろん利用者さん！しかし、ファッションショーの出演に誘った利用者さんの答えは、「NO」でした。

人を動かす「言葉」。

でも、山之口さんはあきらめませんでした。利用者さんに「わくわくする非日常」を味わってもらいたい。その

思いで「どうすれば出てもらえるだろう」「どうすればその人の本音を聞き出せるだろう」と考え、「昔はどんな服を着ていたんですか？」と聞いてみたそうです。すると、利用者さんの一人が「昔は着物ばかり着ていたから、一生に一度は青いドレスを着てみたいなあ」と。そこから衣装をいちからつくり、他の利用者さんの出演も増えていきました。結果、ご家族や地域の方々も招待し、ファッションショーは大盛況！利用者さんの“オシャレをしたい憧れ”という本音を引き出し、決してあきらめない山之口さんのストイックさに、驚きと感動を覚えました。

ファッションショーは単なる手段。

山之口さんは、「ファッションショーをすることが目的ではなく、ご家族や地域の方々と交流を生むための単なる手段にすぎない」と話します。介護施設と聞くと、どうしても外の社会と隔離しているようなイメージを持ってしまいましたが、ファッションショーをきっかけとして利用者さんと地域の交流が広がるなんて素敵すぎます。そんな山之口ゆいさんのお話を、是非ぜひ聞いてもらいたいです！

豊悠福祉会 山之口さんのお話はコチラから！

https://openfukushi.com/movie_show/22



山之口さんプロフィール



社会福祉法人 豊悠福祉会
山之口 ゆい

<https://shoukan.jp/>

2014年入職。高知県出身。大阪府豊能町という人口2万人弱の町で、「町おこし」としてのファッションショーを企画。多世代が交流できる場作りの中心として活躍中。



フクちゃん

みんながみんなの 居場所になる。

安心できる居場所とは？

みなさんにとって、安心できる居場所はありますか？つらいことがあったときに、真っ先に帰りたいくなるような。私にとっての居場所は、家族です。私は物心ついたときから家には父親がおらず、一時期は叔母と祖母に育てられたこともあり、「みんなみたいに、両親がいるふつうの家庭に育ってみたいかな」と、友達がお父さんの文句を言うときでさえ少しうらやましかったり。でもそんな環境で育ってきたからこそ、多様な人とわかりあう力が、私にはあると思っています。安心できる居場所は人それぞれ違う。それが本当の家族じゃなくてもいい。そもそも「ふつうの家族」って？そうあらためて考えさせてくれたのが、みねやま福祉会の榎田啓さんの活動でした。

ごちゃまぜの福祉。

榎田さんは、児童・障害者・高齢者など多世代と一緒に暮らす「ごちゃまぜの福祉」に取り組んでおられます。施設の子どもたちと認知症の高齢者たち、そして地域の方々との交流も、みねやま福祉会ではあたりまえの光景です。あるおじいさんは、リハビリがてらに子どもたちに会いに行く。「よく来てくれたなあ」と、ふだんはちょっとコワイおじいさんが施設の子どもたちを可愛がる。お互いが必要としていて、支えあっているんですね。「老いても若きも、障害のある人もない人も、ごちゃまぜの福祉には人々を元気にする力がある」と、榎田さんは福祉についてこう語ります。

榎田さんプロフィール



社会福祉法人 みねやま福祉会
理事 榎田 啓

<https://www.mineyama-fukusikai.jp/>

学生時代の夢はプロサッカー選手。祖父が創設した法人を継ぎ、地域課題を解決するためのまちづくりにも積極的に関わっている。地元が元気になる新しい福祉のあり方を実践中。

相手のぜんぶを肯定する。

ある日のこと。15歳の少年が施設で暴れたことがあったそうです。そこらへんの瓶を投げつけ、「殺すぞ！」「もう誰も信じない！」「死にたい」と。私だったらきっと、「そんなことしないで」と彼の行動を抑制しようとしてしまう。でも、榎田さんは違いました。彼の親の離婚、施設に初めてきた時のことなど、彼の人生にそっと触れ、こう伝えました。「君はよくがんばっている。君に会えて幸せだ」。少年の存在を肯定し、受け入れる。少年はその場で泣き崩れたといいます。

生きてだけで支えあっている。

子どもたちの繊細な心にふれることは、とても怖いことかもしれない。でも、それはすごく大切なことで、大人が子どもの安心できる居場所をつくってあげないといけない。榎田さんのエピソードから、そう感じました。少年の話聞いて、私は自分の居場所である家族のことを思い出しました。私が生きていて、あなたが生きていて、大切な人の心の支えになっています。熱くてやさしい、榎田さんの素敵な思いに、ぜひ触れてみてください！

みねやま福祉会 榎田さんの
お話はコチラから！
https://openfukushi.com/movie_show/24



シーちゃん

高齢者だから、 認知症だから、 要介護状態だから、できる！

「高齢者の真の社会参加」をめざす河本さん。

「高齢者」「認知症」「介護」と聞くと、「生活するうえで助けが必要」「介護施設と地域との距離が遠い」というマイナスなイメージを、なんとなく持っていた私、シーちゃんです。そんなマイナスイメージ、つまり“偏見”をなくし「高齢者の真の社会参加」をめざしているのが、河本歩美さんです。認知症＝誰かの助けが必要＝なにもできない、ではない。環境と機会さえ整っていれば、認知症の方でも社会参加できる。そのことを、河本さんの活動から気づき、学び、実感することができるんです！たとえば…

高齢者を見る目を変えたい。

代表的な例でいくと、オリジナルブランド「sitte」。認知症や要介護2～3の高齢者が、まな板やカッティングボードを製作し、実際に販売しています。「高齢者施設のレクリエーションの一環としてではなく、ブランドとして市場に流通させることで利用者さんのやりがいを高めるだけでなく、社会の『高齢者を見る目』を変えたい。認知症や要介護状態であっても、実は大きな可能性を秘めています。そんな高齢者の実態を『知って』ほしいという想いをブランド名に込めました」と、河本さんは語ります。

ふつうに買いたくなる おしゃれなブランド「sitte」。

「sitte」で作成されたまな板やカッティングボードは、

京都を拠点としているライフスタイルショップ

「mumokuteki」で販売されています。私も先日、実際に「mumokuteki」におじゃましました！ショップ内は「おしゃれ」かつ「あたたかさ」を感じる雰囲気。実際にまな板を手にとってみると、まさか認知症や要介護認定を受けている方が仕上げているとは思えないほど丁寧な仕上がりで、正直驚きました。この感覚すらも偏見から生まれているなど、少し恥ずかしくなりました。

多くの人に知ってもらいたい！

この丁寧さや、手にとったときの温かみは「高齢者だからできること」なのかもしれないということ。今までの人生で体に染み込んだ優しさや丁寧さ。それらすべてが、この一つのまな板に込められているような気がしますが、高齢だから、認知症だから、要介護状態だから「できない」ではなく、高齢だから、認知症だから、要介護状態だから「できる」。もちろんsitteだけではなく、高齢者を受け入れる「社会づくり」を行っている河本さん。この熱い想いを、ぜひ多くの方に知ってもらいたいです！

京都福祉サービス協会 河本さんの
お話はコチラから！
https://openfukushi.com/movie_show/25



河本さんプロフィール



社会福祉法人 京都福祉サービス協会
地域共生社会推進センター
代表 河本 歩美

<https://www.kyoto-fukushi.org/>

施設利用者が施設外部とつながることを目的に、2018年にsitteを立ち上げ。高齢者の社会参加による活躍が、企業や地域の新たな可能性になると信じ、多様なプロジェクトを展開中。



フクちゃん



シーちゃん

“らしく” 生きるために。

介護の真の正義とは。

フクちゃん：今回は、フクちゃんとシーちゃん、二人で書きたいと思います！私たちが最後にご紹介したいのが、社会福祉法人愛川舜寿会 馬場拓也さんです。

シーちゃん：馬場さんの言葉で印象的だったのが、ある記事で見た「何が介護の『正義』であるか」という言葉。たとえば、「朝ご飯を食べたくない」とおっしゃる利用者さんに対して、健康管理の面から無理にでも食べさせるのが介護なの？誰にだって朝ごはん食べたくないときってあるでしょう？と。

特別養護老人ホームの“特別”って何？

シーちゃん：馬場さんが運営するミノワホームは特別養護老人ホームだけど、そもそも馬場さんは、“特別”っていう言葉に疑問を持ってるそうだよ。別に“特別”なことなんてしていないのって。

フクちゃん：私たちが施設訪問したときも、「利用者さんの生活の中に介護職員が入らせてもらっている」という姿勢で接しているっておっしゃってたのが、すごく印象に残ったな。大事なのは、その人らしく生きること。「要介護」って言葉も好きじゃないな（笑）その言葉ひとつで、人間らしさを失ってしまっている気がするんだよね。

地域との信頼関係、というセキュリティ強化。

シーちゃん：ミノワホームには以前、施設と地域との間に壁があって、馬場さんはそれを取り壊したそうです。

「壁を壊す」という選択をしたのは、利用者さんと地域の方々との接点をつくり、あえて施設の営みを地域の方に「見える化」することで、地域全体で風通しの良い関係を構築するためなんだと思います。「地域との信頼関係というセキュリティ強化」という馬場さんの言葉にもあるように、それが真のセキュリティ強化につながっていることに気づかれました。

風通しの良い地域をつくる。

フクちゃん：介護について知らないことが、まだまだたくさんあります。ごはんやお風呂、トイレのお手伝いをしたり、レクリエーションを行ったり、そういう、具体的な“お手伝い”は思いつくかもしれない。だけど、本当の意味での介護は、それだけではありません。利用者さんのプライバシーを守ること、地域との交流を生み出すこと、それらもまた介護をするうえでとても大切なことです。何よりも、利用者さんが幸せに、自分“らしく”生きること。それが、介護の本当のゴールかもしれない。馬場さんの活動を知り、そんなふうに感じました。

愛川舜寿会 馬場さんの
お話はコチラから！

https://openfukushi.com/movie_show/26



馬場さんプロフィール



社会福祉法人 愛川舜寿会
常務理事 馬場 拓也

<https://aikawa-shunjukai.jp/>

大学卒業後イタリアのファッションブランド「ジョルジオ アルマーニ」にてトップセールスとして活躍した後、2010年34歳の時に2代目経営者として現法人に参画。

福祉を探索する動画サイト OPEN FUKUSHIのご紹介

OPEN
FUKUSHI



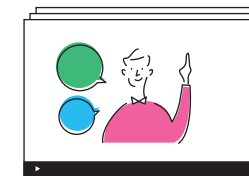
<https://openfukushi.com/>



OPEN FUKUSHIとは

福祉はこんなにももしろい！ を動画でアーカイブ

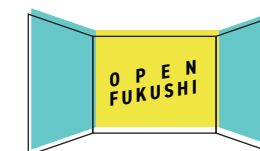
枠にとらわれない福祉の取り組みをしている方のセミナーや、福祉そのものについて語るトークイベント。現場のリアルな声を聞けるものから、就活のヒントになるものまで。いろんなテーマの動画を、興味に応じて閲覧できるようにアーカイブしていく動画サイト。それが「OPEN FUKUSHI」です。ふだんはなかなか聞けない福祉にまつわるお話に、「この取り組みも福祉なんだ！」とか「こんなことも福祉の仕事でできるんだ！」など、意外な気づきや将来への手がかりが生まれれば嬉しいです。一つひとつの動画は、福祉の魅力がひろがる入口。さあ、トビラをひらこう。



こんな想いでやっています

ひらけ、フクシ！

福祉をひらけば、世界がひろがる。対人援助だけでなく、福祉の仕事は想像以上に幅広い。地域づくり、まちづくり、誰もが生きやすい暮らしをつくる実践は、業界・業種・分野など境界線をこえた取り組みも少なくありません。新たな福祉のいち面は、いつもワクワクドキドキさせてくれます。そのおもしろさを知ってほしい。教室からでは伝わらない魅力を感じてほしい。まだ知らない福祉のトビラをひらいた先、ひろがる世界にあなたは何を思うだろうか。前へ進む、追い風になれることを願って。OPEN FUKUSHIを、オープンします。



FACE to FUKUSHI について

私たち一般社団法人FACE to FUKUSHI（フェイス トゥー フクシ）は、2009年に「全国若手福祉従事者ネットワーク」として設立して以来、福祉業界を人の面から支えてきました。福祉業界をめざす学生と福祉法人の橋渡しや、若手職員が安心して働き続けられる環境づくりのサポートなどを行っています。学生と福祉法人のハブとなり、お互いがハッピーな関係になれるよう精一杯サポートする。それが私たちの役割です。

さいごに...

なんでもない福祉。

福祉は、なんでもない。こんなことを言ってしまうと、福祉をばかにしているのか、と怒られそうですが、そうではありません。みなさんが持っている福祉に対するハードルを取っ払っていただきたいのです。福祉というと、介護や障害者支援など「何か特別な理由によって困っている誰かを支える、特別な仕事」みたいなイメージがあったんですが、実際はそうではないんです。子どもを笑顔にしたり、おじいちゃんやおばあちゃんとの会話を楽しんだり。みんな、「普通に」生活して、「普通に」日々を送っている。たしかに、大変な部分もあるし、いいことばかりじゃない。だけど、それ以上に誰かの暮らしや命にまで踏み込んで関わることの幸せや、尊さを感じられる素敵な仕事。このことを知れたのは、私の大きな財産です。(フクちゃんこと中川弘子)

ちっぽけな私 が 世界 を 変える。

福祉のインターンを通して、考え方が450度変わりました。介護職の仕事は、利用者さんの幸せをつくる仕事だと知り、固定概念をぶち壊されて180度。一方で食事や排泄の介助などでうまくいかず試行錯誤する過程ではしんどさやキツイと感じる部分があるのも当然ということを感じ、また180度。要するに生活の介助と利用者さんの幸せをつくる工夫。この2つの両立が介護の仕事には必要だと納得し、90度。「福祉ってこんなに素敵な仕事なんだよ!」と、私一人が叫んで変わるほど、世の中そんなに甘くない。でも、どんなにちいさな活動でも、誰か一人の心を動かせたなら。その誰かが、周りの誰かに話して、その人も共感してくれたなら。ちっぽけな私でも、君でも、必ず世界を変えていける。そのことを、私は福祉から教わりました。(シーちゃんこと澤田佳詩乃)

介護で働く魅力発信BOOK

「暮らしをつくる」一カイゴの仕事研究室学生レポート

[発行] 一般社団法人FACE to FUKUSHI

[お問い合わせ]



〒530-0001

大阪府大阪市北区梅田1-3-1大阪駅前第1ビル4階106号室

TEL:06-4799-0108 mail:fukushigoto@f2f.or.jp

<https://fukushigoto.f2f.or.jp>

本冊子は厚生労働省補助事業「介護のしごと魅力発信等事業(ターゲット別魅力情報発信事業(若年層向け))」として作成しています。